茨城大学教育実践研究 **29**(2010), 101-109

多様な学習活動との連携をはかった家庭科の指導の検討

—— 附属中学校「弁当の日」を手掛かりに ——

佐藤　裕紀子*

(2010 年 9 月 15 日受理)

Examination of Home Economics Education through Learning Activities : An Analysis of "Bento-no-Hi" in Ibaraki University Junior High School

Yukiko SATO

キーワード：家庭科, 継続的実践, 学習活動との連携, 弁当の日

本研究は、茨城大学附属中学校で実施されている「弁当の日」に注目し、家庭科がこの活動と連携をはかることにより、家庭生活での実践を補完するものとして活用していくことができるための課題を提示することを目的とする。研究方法としては、「弁当の日」のワークシート 68 枚を用い、そこに記された生徒たちのコメントを内容分析し、弁当作りの経験が生徒たちにどのような意味をもっていたのかを検討するとともに、家庭科としての課題を提示する。分析の結果、家庭科が「弁当の日」と適切に連携するためには、家庭科での既習事項を「弁当の日」の実践に意識的につなげていくこと、家事労働の一部にしかすぎない弁当作りを家庭のしごととして発展させていくこと、課題への取り組みを支援したり保護者からのコメントを活用したりして家庭のしごとに関わることの楽しさや喜びを知ることができるようにすることなどが課題として見出された。今後、家庭科が多様な学習活動と連携していくためには、その学習活動で生徒たちが習得したものは何かを適切にみきわめ、それを実践的な力の形成という観点から見直し、家庭科のねらいにそった指導として展開していくことが課題となろう。

Ⅰ　関心の所在と目的

家庭科教育は自立した生活主体を育むことを目指している。ここでいう自立した生活主体は、すすんで家庭生活に参画できるとともに、知識や技術を活用して創造的に生活を営むことができる力をそなえていることを条件とする。そうした力の形成には、学校での学習活動の充実とともに、継続的実践の機会として家庭を機能させていくことが重要である。だが、今日では子どもたちの生活が多忙化していることに加え、家庭のしごとに不慣れな子どもたちの関与は、ときに家庭生活を反って煩雑化してしまう契機ともなるため、親側の多忙な生活状況とも相俟って、必ずしもすべての家庭が学校における学習の実践の機会として機能していないというのが現状である[1)]。家庭間格差を超えて、すべての子どもたちに継続的実践の機会を保障していくことは、家庭科教育の今日的課

*茨城大学教育学部

題のひとつであり、そのためには今後の家庭科教育においては教科の枠にとらわれず多様な学習活動に広く目配りし、適切に連携をはかることにより、実践の機会として活用していくことが必要である。そこで本稿では、一昨年より茨城大学教育学部附属中学校（以下、附属中学校）において行われている「弁当の日」に注目し、家庭科がこの取り組みと適切に連携をはかることができるための課題を検討し、今後の家庭科の指導のあり方を提示したい。

あとに詳述するとおり、附属中学校における「弁当の日」では、生徒は親の助けを借りずに自分だけの力で弁当作りに関わる一連の作業を行い、自分の昼食用の弁当を完成させることが求められる。自分のための弁当作りとはいえ、普段、ほとんど家庭のしごとを親に任せきりにしている生徒たちにとって、この取り組みは生徒が家庭のしごとに関心をもつようになったり、自分の生活は家族により支えられていることを理解したりする一助となることが予想されるため、生徒の家族の一員としての自覚を喚起し、主体的な家庭生活への参画を促す契機となる素地をもつと考えられる。だが、家庭科での調理実習がたんなる「楽しいイベント」に終始してしまうことも多いことを考えると、「弁当の日」の取り組みを上述した家庭科教育の課題につなげるためには、相応の工夫が必要であると考えられる。

こうした課題意識にもとづき、本稿では「弁当の日」に使用されたワークシートを手掛かりに、「弁当の日」が生徒にとっていかなる意味をもっていたのかを明らかにし、さらにどのような働きかけがあれば生徒の日常的な家庭生活への参画が促進されるのかを検討し、家庭科としての課題を提示する。

Ⅱ　研究方法

１．分析資料

分析資料としては、附属中学校の平成 22 年度　第１回「弁当の日」にあたって生徒たちが記入したワークシート 68 枚を用いる。これは、「弁当の日」の実施対象学年である２年生のうち、道徳部会所属教員が担任をつとめる１組と２組で提出されたものである。標本が少ないという誹りはまぬかれないが、本稿では量的な分析を主眼としていないため、分析資料としては足るものと考える。

ワークシートの記入欄は、弁当作りの前に記入する、①「献立」欄、②弁当箱に詰めた場合の「レイアウト」欄、弁当作りの後に記入する、③「感想・工夫したこと・気がついたこと・次回に生かしたいこと」欄、④「おうちの人から一言」欄の４項目から構成されている。このうち、本稿が分析対象とするのは主に③である。

２．分析の視点

家庭のしごとへのかかわりが生徒たちの家族の一員としての自覚意識を高め、主体的な家庭生活への参画につながるためには、家庭にはさまざまなしごとがあり、自分の生活はそうしたしごとの遂行を通して家族により支えられていることを知るとともに、家庭のしごとを工夫することの楽しさややりがいにも気づくことが必要であると考える。そこで、本稿では以下の視点から資料の分析をおこなう。まず、分析資料の記述内容から、A.感じたこと・気づいたこと（弁当作りをとおして感じたこと・気づいたこと）、B.今後の目標・意欲（次回の「弁当の日」やこれからの家庭生活で実

行していきたいこと)、C.創意工夫（弁当作りのなかで創意工夫したこと)、D.達成感・充実感（弁当作りをとおして得られた達成感・充実感)、E.その他（A～D 以外)、に関する記述をそれぞれ抽出する。この作業により整理されたデータから、弁当作りの経験が生徒にどのような意味をもっていたのかを検討し、家庭科としての課題を示す。

Ⅲ　附属中学校における「弁当の日」

結果を示すまえに、ここでは附属中学校における「弁当の日」の概要と位置づけ[2)] について確認しておく。

１．「弁当の日」の概要

「弁当の日」は、香川県で小学校校長を務めた竹下和夫氏の提唱で始まった取り組みである[3)]。そもそもの趣旨は、子ども達自身にお弁当を作らせることによって、家庭での会話や家族そろっての食事の機会が増えることねらったものである。竹下氏のよびかけによる「弁当の日」は 2001 年にスタートしたが、それがメディアに紹介されるや全国的なひろがりをみせ、2010 年 4 月現在で「弁当の日」の実践校は 39 都道府県の 583 校に及んでいる。

各所で取り組まれている「弁当の日」は食育活動の一環として行われていることが多いが、附属中学校の場合は体験活動と関連づけた道徳指導の一環として活用されている。平成 21 年度に、2 年次を実施対象学年としてスタートした。道徳部会所属教員らの熱心な指導はもとより、校長、教頭の理解、担任、保護者の協力等に支えられ、学校全体を巻き込んだ行事となっている。2 年目になる本年度は、異なるテーマのもと、年 4 回の実施が計画されている（表 1)。

表１　附属中学校の「弁当の日」におけるテーマ(平成 22 年度)

実施日	テーマ
5 月 17 日(月)	初めて？自分で創るお弁当～頑張る自分を応援しよう～
9 月 21 日(火)	和食ってすごい！「まごはやさしい」弁当づくり
11 月 22 日（月)	茨城県を応援しよう！茨城県産食材活用「地産地消弁当」
1 月 17 日(月)	日ごろの感謝をこめて！「家族のために作るまごころ弁当」

具体的な実施の手順は次のとおりである。実施日としては休日の翌日が設定されているので、まず、金曜日の LHR（ロング・ホーム・ルーム）をつかって、「弁当カード」（本稿で分析資料とするワークシート）に献立や弁当のレイアウトなどを記入する。次に、休みあけに各自が自作の弁当を持参し、それを担任が写真におさめる。生徒は昼食時に自分の弁当を食べ、帰りの HR で「弁当カード」に振り返りを記入する。そして、後日、生徒は各自の「弁当カード」に保護者のコメントを書いてもらい持参する。

弁当作りにあたっては、①おかずは 2 品以上つくる、②1 品はレトルト食品でもよい、③彩りを工夫する、という 3 つの「ルール」が設定されている。また、「献立を立て、食材を買うところから、

調理して、弁当に詰める」ところまで、生徒自身が行なうこととなっており、保護者に対しては、書面や保護者会を通じて、趣旨説明と協力依頼がなされている。

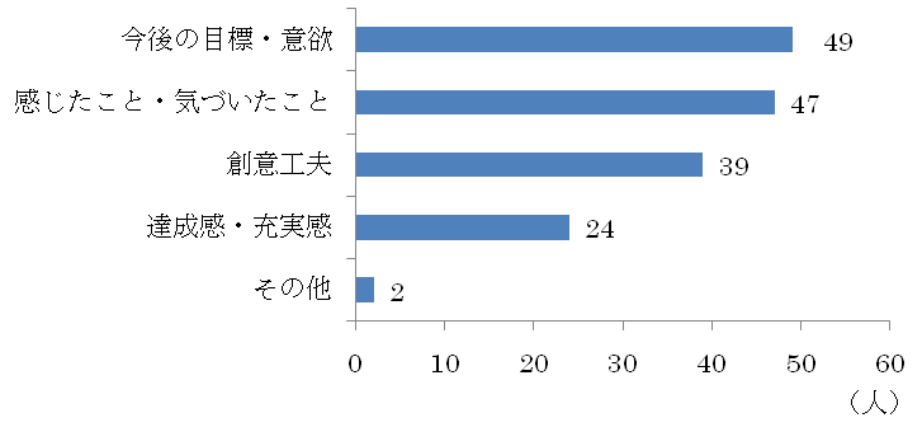
２．「弁当の日」の位置づけ

附属中学校道徳研究部では、研究主題として「自己や他者との多様なかかわりを通して、生徒の思考・判断を促す道徳の時間―身近な資料を教材化した授業づくり―」が設定されており、これに迫る具体的な施策として、（1）体験活動を生かすなどのかかわりを深める指導の工夫、（2）自己と他者のかかわりを深める魅力的な教材の開発や活用の工夫、（3）自己や他者とのかかわりの中で、表現し考えを深める指導の工夫、（4）自己や他者とのかかわりを通して自らの人間としての生き方についての自覚を深める事後指導の工夫、（5）道徳資料や「道徳だより」の掲示による環境整備、の５点があげられている。このうち、「弁当の日」は主として（1）に関わり、そのほか（2）・（3）も視野に入れて学習指導計画が立てられている。これらの指導は、学習指導要領に示された道徳の内容項目のうち、「多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる」に接近するためのものとして位置づけられており、最終的には「感謝の気持ちを言葉や行動で表現し、相手の思いに応えようとする道徳的態度を育て」ることをねらったものとなっている。

Ⅳ　結果

ワークシートの記述内容のうちわけは、図１のとおりであった。

図１　記述内容



１．「今後の目標・意欲」

「今後の目標・意欲」に関する内容は、49 人（72.1%）ともっとも多くの生徒が記していた。このなかには「次回も頑張りたい」といった漠然とした内容も含まれるが、具体的に書かれたものでは、「もう少しスムーズに作りたい」「一度に多くの種類をつくれるようにしたい」など、弁当作り

の効率性を課題として指摘した生徒がもっとも多く 15 人、次いで多かったのが「工夫したおかずを作りたい」「違う料理法も使いたい」など料理・調理技術の向上への意欲を記した生徒が 10 人、「もっとキレイにしたい」「詰め方を工夫したい」など弁当の外観や弁当作りの技法の向上への意欲を記した生徒が 9 人であった。

次回の弁当作りに向けた目標や意欲のほか、「ときどきこうやってお弁当をつくって新化（ママ）させたい」、「いろいろと料理をして努力したい」など、日常的な実践に向けた意欲を記した生徒も 3 人あった。

２．「感じたこと・気づいたこと」

「感じたこと・気づいたこと」に関する内容は 47 人（69.1%）が記していた。これらの内容には大きくわけて 3 種が含まれており、多い順に「大変だった・苦労した」41 人、「難しかった」13 人、「楽しかった・おもしろかった」2 人となっており、ほとんどの生徒が弁当作りの大変さや難しさを実感したことが確認された。

大変だったことを記した内容としては、「初めての弁当づくりは、朝の早起きが大変でした」、「朝早く起きてお弁当をつくると、寝不足などで、1 日中スッキリとしなくて大変だなと思った」など、朝早く起きて作ることの大変さを指摘したものがもっとも多かった。なかには、「今回のお弁当作りで、大変なのは、実際に作ることだけではなく、献立を考えて、買い出しにもいかなければならないからだと思いました」などといった、お手伝いという立場ではなく、弁当作りの全過程に責任ある立場として関わったことから生まれた実感を指摘した内容もみられた。

大変だったことを記した内容のうち、日ごろの弁当作りの「作り手」（ほとんどの生徒にとっては母親）に意識をむけた記述があったのは 22 人（32.4%）で、「この弁当作りをして、お母さんは毎日こんなに大変なことを朝からやっていて感謝したいと思いました」、「こんなお弁当をつくっているお母さんはとてもすごいと尊敬しました」など、感謝や尊敬の念を抱いたことを記したものが多かった。

難しかったことを記したものでは、揚げ油の温度調節、肉の焼き加減などの調理技術、献立作成、おかずの詰め方などに関する内容がみられた。

３．「創意工夫」

「創意工夫」に関する内容を記した生徒は 39 人（57.4%）であった。これらは、「前の夜に下準備をして、朝あまり時間を使わないようにしました」、「フライパンをウィンナー、たまご焼き、野菜いため、焼肉のよごれそうな順に利用し、キッチンペーパーを使って、朝の忙しい時間を短縮できるようにしました」など、弁当作りの段取りについて記した内容がもっとも多かった。そのほかとしては、「枝豆は食べやすいように串刺しにしておきました」など、食べやすさの工夫を記した内容も一部にみられたものの、ほとんどは「トマトやブロッコリーを入れることで彩りを工夫した」、「色が地味な雰囲気になるので、肉にはチーズを乗せて黄色っぽくしました」、「ちくわとハムとチーズの巻き物では、巻く順序を変えたりして、見た目も変わるようにしました」、「色どりや栄養の面では工夫できたと思います」など、外観や栄養面で工夫したことを記した内容であった。これはワークシートに弁当作りの「ポイント」として、①「たくさんの色を使おう（栄養面の充実）、②下

ごしらえをいつ、どうするか（日曜日の夜準備あり）、③焼く、煮る、揚げる、切る、ゆでる、むす、いろいろな調理器具を使い、同時に作ると早い」、といった段取りや彩り、栄養についてのアドバイスが記されていたことが影響したものと考えられる。

４．「達成感・充実感」

「達成感・充実感」に関する内容は24人（35.3%）の生徒が記していた。その多くは「すごくおいしかった」「上手くつくれてよかった」などであったが、なかには「いちから作るのは難しく、でもそれを食べた時は満足感があり、すごくおいしかった」、「ねむい目をこすりながらつくるお弁当は、苦労がある分、おいしく感じられる」など、弁当作りの大変さや難しさを経験したことから生まれた達成感や充実感を記した内容もみられた。

５．「その他」

「その他」の２人は、ボーイスカウトでの経験や１年次の家庭科の調理実習の経験など、ともにこれまでの知識や技術を生かして取り組んだことを記していた。

Ⅴ　考察

１．弁当作りの経験がもつ意味

本稿で分析対象としたワークシートには、今回の弁当作りでほとんどすべての生徒が自分なりの創意工夫をこらし、それぞれの課題にむかって一生懸命取り組んだようすが描かれており、なかで、次回の弁当作りに対する意欲を記した生徒は７割をこえていた。この結果は、今回の弁当作りが、生徒たちにとって、家庭のしごとに関わる前向きな姿勢を促す意味があったことを示すものといえる。

また、今回の弁当作りでは、すべての生徒が献立作成や買い出しを自ら行ない、下準備をしたり早起きをしたりして一連の弁当作りの全過程に責任をもって関わることとなった。ワークシートの分析からは、こうした経験は、生徒たちにとっては家庭のしごとの大変さを知る契機であると同時に、自分たちが毎日、当たり前のように食べている弁当が家族の苦労や工夫により作られていたことに気づき、その担い手に対して感謝や尊敬の念を抱く契機でもあったことが確認された。この結果は、日ごろ、家庭のしごとをほとんど親任せにし、それを当り前のこととして受け入れている生徒たちにとっては、その「当たり前」を問い直す意味において大きな意義をもつものであったといえる。

さらに、達成感・充実感を記した生徒も３割をこえていた。「達成感・充実感」は生徒たちの内発的な行動の誘因となることから、今回の弁当作りは、たんに「弁当の日」の実践にとどまらず、日常的な家庭生活への積極的な参画へとつながる可能性をも潜在するものであったといえる。

２．家庭科としての課題

前述したように、そもそも附属中学校における「弁当の日」の体験活動は、道徳指導の一環として活用されているものである。本来のねらいである、「多くの人々の善意や支えにより、日々の生活

や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる」道徳的態度を育てるという観点からみると、今回の取り組みは一定の成果をおさめていることが、生徒のワークシートへの記述内容から確認できる。とくに今回は全４回の計画のうちの初回であり、実施後には丁寧な道徳の指導も行なわれていることから、今後、回を重ねるなかで生徒たちの気づきや思考が発展していくことも期待できる。

それでは、家庭科がこの「弁当の日」の体験学習と連携をはかり教育の実をあげるためには、どのような課題をクリアすればよいであろうか。今回のワークシートに「目標・意欲」に関する内容を記した生徒は多く、それは確かに生徒たちの今後の家庭生活への積極的な参画を予見させるに充分足る内容であったのだが、すでに確認したように、実際に日常的な実践に向けた意欲を記した生徒はわずか 3 人であった。これは、家庭科としては大いに課題意識をもつ必要のある結果である。家庭科の調理実習が実際の生活での生きた力となりにくい現状を考えるならば、なおさらである。家庭科が「弁当の日」の体験学習と連携し、本稿の冒頭で述べた家庭科としての課題につなげるためには、今後、以下の点に留意した指導の工夫が必要となろう。

第一に、家庭科で習得した知識や技術を「弁当の日」に活用できるための工夫である。附属中学校における技術・家庭科（家庭分野）の年間指導計画では１年次に食領域の学習が設定され、その一環でお弁当の調理実習が行なわれている。そこでは「簡単でおいしいお弁当のおかずを教えてもらおう！！」というタイトルのもと、なるべく 30 分以内で作ることができ、おいしく、栄養もあるお弁当のおかずのレシピを家の人にインタビューするという試みもなされている。これは、生徒たちの家庭で日常的に食卓にのぼる馴染みの深い献立を扱うものであり、実生活により近い形で学ぶことができるという意味において、生きた力の形成に大きな効果が期待できる取り組みである。だが、今回のワークシートをみる限りでは、昨年の家庭科での学習に言及した生徒は１名であった[4)]。家庭科における既習事項を「弁当の日」の体験学習に意識的につなげていく工夫が求められる。

第二に、「弁当作り」を「家庭のしごと」として発展させる工夫である。家庭生活はいわゆる広く家事労働に包摂される多種多様な営みにより成り立っており、家庭科ではこれらを「家庭のしごと」として、職業労働と同等の価値をもつものとして扱っている。弁当作りはこうした家庭のしごとの一部にしかすぎない。家庭科では、「弁当の日」の経験をひとつのきっかけとして、生徒たちが自分の家庭生活を見つめ、多種多様な家庭のしごとが誰によってどのように営まれているのかを知り、家族の一員としての自分の役割に気づくことができるような指導に発展させていくことが求められる。

第三に、生徒たちが家庭生活に主体的に参画することの喜びや楽しさを知ることができるための工夫である。今回、弁当作りの全過程に責任をもってかかわったことで、生徒たちは弁当作りの大変さや難しさを身をもって体験することとなった。だが、ワークシートに日常的な実践に向けた意欲を記した生徒がわずか３人であったことが示唆するように、家族の苦労や大変さを知るという経験は、家族に対する感謝や尊敬の念を喚起することにはつながっても、家族の一員として主体的に家庭生活に関わることには必ずしもつながらない。また、親の苦労を理解することは、今日では容易に家庭形成や親役割への嫌悪感にむすびつくことにも充分留意しておく必要がある[5)]。実践的な力の形成をねらう家庭科教育に関わる立場からは、ワークシートに記されたコメントにていねいに目配りし、弁当作りの経験から生徒たちが見出した自身の課題に対し、それぞれに挑戦し成し遂げていくことができるよう適切に支援し、生徒たちが家庭のしごとに積極的に関わることを通して成

長する喜びを実感できるようにすることが求められる。また、今回は分析対象としなかったが、保護者からのコメント欄には、わが子に対する「称賛・感謝」(77.9%)、「今後に対する期待」(27.9%)などが多くみられた[6)]。こうした家族からのコメントを効果的に活用することも、生徒たちが家庭生活に参画する喜びや楽しさを知るうえで大きな力を発揮することとなろう。

Ⅵ　まとめと今後の課題

本稿では、「弁当の日」の体験学習と家庭科との連携のしかたについて検討してきたが、最後に家庭科がひろく多様な学習活動と連携するうえでの課題を提示しておきたい。

家庭科は、知識や技術の習得だけでなく、それを実際の家庭生活で活用できる実践的な力の形成を目指している。こうした力の形成のためには、よりよく生活するために必要なことをカリキュラムに沿って体系的に教える学校の授業と、その継続的実践の機会としての家庭生活の両者が適切に連携することが本来きわめて重要である。家庭科が他の学習活動と連携をはかり、家庭生活での実践を補完するものとして活用していこうとする場合は、当該の学習活動がたんに家庭科の学習対象である家族や家庭生活に関わることがらを扱っているという点だけに着目するのではなく、その学習活動で生徒たちが習得したものは何かを適切に見きわめ、それを実践的な力の形成という観点から見直し、家庭科のねらいにそった指導として展開していくことが課題となろう。

現在、茨城県における中学校の技術・家庭科教員は各校に多くて１名配置されているだけである。1 人の教員が複数の学校を兼務したり、非常勤によりまかなわれていたりする場合も少なくない。これらの場合、家庭科教員が他の学習活動に広く目配りすることは難しく、ましてや生徒たちの家庭生活の実態を見極め、家庭と適切に連携をとって指導を行なうことはきわめて困難である。こうした状況を考えると今日の家庭科の教育体制はきわめて不十分なものといえ[7)]、その改善を求める声を強めていくことはもちろん重要であるが、同時に各学校における家庭科担当者がそれぞれの立場で地道な実践に取り組み、そうした実践の蓄積から相互に学び合っていくことも必要であろう。教育現場での今後の実践の積み重ねに期待したい。

謝辞

本研究をすすめるにあたっては、茨城大学教育学部附属中学校の佐藤宗夫教諭、髙橋文子教諭より貴重な資料をご提供いただき、家庭科教諭の川又祥子教諭にもご協力を頂いた。記して御礼の意を表したい。

また、平成 22 年度「実践センター・学部附属連携研究費補助金」の助成も受けることができた（研究課題名：道徳教育との連携をはかった家庭科の実践的な家族学習に関する研究）。心より感謝申し上げたい。

【 注 】

1）こうした状況は各所で指摘されている。たとえば以下の文献に指摘がみられる。

福田公子「生活実践と家庭科教育」福田公子・山下智恵子・未知子編著『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』（大学教育出版，2009），pp.1-9.

2）附属中学校の「弁当の日」の概要と位置づけに関しては、次の資料を参考にした。本文中の引用も同資料による。
茨城大学教育学部附属中学校『平成 22 年度　第 1 回公開授業研究会　道徳分科会資料』.

3）竹下和男氏の提唱により始まった「弁当の日」については以下の文献等に詳しい。
竹下和男『〝弁当の日〟がやってきた―子ども・親・地域が育つ　香川・滝宮小の「食育」実践記』（自然食通信社，2003）．佐藤剛史『すごい弁当力！子どもが変わる、家族が変わる、社会が変わる』（五月書房，2009）.

4）具体的には、「一年生の時に家庭科の学習で学んだことを生かすことができて良かったです」といった記述がみられた。

5）2010 年度において茨城大学教育学部の学生 244 名に「家族の生活時間調査」の課題を出し、調査結果をみた感想をレポートとして提出させたところ、約 6 割の学生が親の苦労や親の大変さなどについて言及していたが、そのなかには、「だから将来、結婚したくないと思った」、「だから学生のうちに遊んでおかなければならないと思った」などの感想も散見された。

6）一般的には、親の側が家庭のしごとから子どもを遠ざける場合が多いことが指摘されているが、今回のワークシートでは、子どもたちの家庭のしごとへの日常的な関わりを期待するコメントが多数を占めた。

7）家庭科教員の配置に関する問題以外にも、家庭科の教育体制には多くの問題があることが指摘されているが、ここで触れることはしない。それらの問題については、以下の文献に詳しい。
田中陽子「家庭科教員の採用と配置　新規採用の状況と男性家庭科教員の誕生」日本家庭科教育学会『家庭科教育 50 年　新たなる軌跡に向けて』（建帛社，2000），pp.201-204．石川尚子「家庭科教員の勤務環境　勤労条件と就労意識」」日本家庭科教育学会，前掲書，pp.205-208．柳昌子「家庭科の施設・設備　設置基準の変遷と今日的課題」日本家庭科教育学会, 前掲書, pp.209-212.